

つこ
いと
てに

串田孫一

考えることについて

2

スピカ叢書 1

考えることについて

一九五五年四月十五日 発行

一二〇円

著 者 串 田 孫 一

発行者 児 玉 寿 雄

印刷所 英 文 社

スビカ書庫編集所 電話東京②二三五九

東京都千代田区神田駿河台三ノ五

発行所

東京都千代田区
富士見町二ノ九 株式
会社

光の友社

振替東京一八四五九四
電話九段③③ 三四九四

落丁乱丁本はとりかえます

目次

I

考えることについて	一
見ることについて	八
疑うことについて	一五

知ることについて	三
欺くことについて	元
働くことについて	弐
遊ぶことについて	三
真似ることについて	吾
作ることについて	毛
笑うことについて	齒
別れることについて	七
愛することについて	六
夢みることについて	金

Ⅱ

夕暮の丘

四

芸術的ないとなみ

九

生活の抑揚

一四

人生の岐路

一七

仕事への愛情

二三

根気について

二六

若い情熱

三〇

微生物の笑い

三六

読書について

三五

純潔について 一四三

■

文化的生活について 一五九

怒りの内部崩壊について 一七〇

絶望感について 一七三

手垢のついた言葉 一八四

現代のユーモア 一九二

あとがき 二〇四

考えることについて

1 考えることについて

私の部屋の窓際に柿の木が一本あります。小さな渋柿が毎年僅かなるだけなので、時々切り倒して薪にしてしまおうかと思うのですが、夏の日除けにはなりますし、冬はさっぱりと葉を落して日あたりをよくしますから、まだそのままにしてあります。それと、もう一つはこの柿の木を切り倒すことが出来ないのは、小鳥がよくとまりに来るからです。地方によっては紋付鳥などと呼んでいる常緑じょうりくという、胸毛のオレンジ色の綺麗な鳥がいますが、この鳥がよく柿の枝にとまります。小鳥たちが気持よさそうに囀っている時、あるいは木の実を啄んだり、小虫を追っかけたりしているのを見ていますのは無論楽しいことなのですが、何をしてもなしにじっとただ枝にとまっている時、私はあの鳥は何をしているんだろうと思います。何をしているというより、一体何を考えているのだろうと思います。あの漆のよう

に真黒く小さく光った眼、撫でてやることは殆んどむづかしいあの頭を少し傾けているのを見ていますと、何か考えていそうに思うのです。実際小鳥の生態について書かれた本を読みますと、その生活は決して単純なものではなく、幼いころの危険におびえる心があり、愛の歌があり、領域の争いがあり、またその間には種類の異った小鳥たちの間での友情もあるということがあります。

私は前に申し上げましたように、この小鳥が囀っていたり、はっきり目標を見定めて飛んで行く時にはその行動が大体はこちらにも分りますから、まあ安心して見ていられるのですが、しょんぼりと木の枝にとまっているのを見ていますと、どんなことを考へ、どんな想いに耽っているのか見当がつかないために、何ですか、急に不安になって来ることがあります。あんまり考え込んで枝からほとんと落ちるのではないか、そう思って、若し意志の疏通が出来るものなら、小鳥の気持をたずねたくなります。人間は実に勝手なもので、自分の周囲の何を考えているのかも分らない動物に、いわゆる情を移して、猫や犬のために泣いてやることもありますし、林檎を可愛いと思うっているうちに、その気持が分るといって己惚れることもあります。

ところで、お互いに意志や心持を通じることの出来る人間同志のあいだでも、人がぼんや

りと、一点を見詰めて、頬杖を突いてじっとしていますと、ただその姿を傍から眺めていただけでは、その人の心の中にどんなことがあるのか分かりませんから、その容子を見て、苦しいことがあるのではないか、心配ごとが出来たのではないか、そんな想像をしてこちらが気を揉むわけであります。

ここで二つの有名な彫刻を思い出して頂きたいのですが、その一つは、ミケランジェロが作ったロレンツォ・ディ・メディチの墓に置かれてあるロレンツォ公の像です。ある人の説によりますと、これは必ずしもロレンツォ公の肖像ではないということですが、それはどうでもよいのです。兜をかぶり、腰かけて、左手はその脇を膝の上の小さい函のようなものの上に置いて、そしてその手を顎から口のあたりへ持って来ています。その顔は少し下を向いて、一箇所を見詰めています。この彫像はイタリア語で *Penseroso* といわれていますが、思いに耽ける人、思案する人、つまり何かを考えている人ということです。何を考えているか、気にはなりますがこれは分かりません。しかし、その姿は写真で見ただけでも心を打つものがあります。歴大な日記を残したスイスの思想家のアミエルは若い時にイタリアへ旅行をしました時に、美しいフィレンツェの町でこの彫像を見て、非常に感動しました。そして後に、自分の詩集にもこの「思いに耽ける人」という題をつけた程です。

それからもう一つはロダンの「考える人」です。この方はたとえ写真やブック・エンドなどの模造品などでもあまり見なれていすぎるかも知れませんが、私はあの彫刻の顔の部分だけを大きく撮った写真を持っています。右手の甲に顎をのせているその顔は、確かに考えている顔ではありませんけれども、見ていますと時に非常に苦しそうに見えます。眉根によせられたあの大きな皺、というより寄せ集められた筋肉の塊は、単に高く遠いことを考えているというよりも、考えることのために苦んでいるようにも見えるのです。

手で顎を支えるというそのポーズも問題にすることが出来るかも知れませんが、一体考えるということとは楽しいことであるよりも苦しいことが多いのでしょうか。これは自分の経験から、他人の容子をみていてもいえることです。恐らく人は充分に楽しい時には何も考えない、また考えたくないのだと思います。そしてまたその時には考えずにいることが易しいのだと思います。有頂天になり、無心になっていられます。ところが苦しい時にはそれを考えまいとしても、それを忘れてしまおうとしても、なかなかそれが出来ません。そのことが頭の中の何処かにこびりついていて、棄ててしまおうと思えば思う程、かたくしっかりとくっついてしまって、考えるためのいろいろな働きがみんなそこへ集ってしまいます。これは人間の本質とでもいうことであって、どうにもならないことなのでしょうか。一概にそう

だともいえません。なぜかといえば、苦しみに伴った考えは切実でありますから、私どもにもかなりはっきりした記憶があるのでしょうけれども、考えるという人間に与えられた働きの本当の役目は、そうした苦しきのためにくよくよして愚痴を洩らすことではなくて、もっと意義のあること、一足飛びに少し大きなことをいえば、人間がよりよい状態を自ら作るための工夫、あるいはそのための努力だといってもよいと思います。それは極めて大きな、遠い目的ではありますが、そこへつながる、もっと手近かな目的を私たちは見附けます。自分が健康な状態を保つために、生活をどうしたらよいか、あるいは一つの家庭の生活の中から少しでも不合理なことをなくすために、どういう点を改めたらよいか、そういう種類の極く細かいことを考えることも、実は確かに大きな目的につながります。

考える人、といって、ミケランジェロやロダンの彫刻を想い出すことは悪いことではないのですけれど、暗い、沈鬱な雰囲気にひたりながら、ただ徒らに自分の過去の惨めな姿を想い描いたり、どの道を辿ってみたところですべて閉ざれた門しかないような、そんな未来を好んで考える人のことをそこへ結びつけることはあまり感心は出来ません。哲学者は考えることが商売で、いつも八つ字を寄せてじっとしている人のように思われています。そして何を考えているか分かりませんが、他の一般の人たちが考えるようなことは一切考えないためか、

身なりを構わない穢らしい、屑屋のようなあるいは乞食のような人のことを哲学者みたいだといひます。そしてひと度口をきけば、普通の人には殆んど理解出来ないこと、理解するとすればそのために大変な努力をしなければならぬようなことをいふ人です。どうしてこんなに不名誉なことになってしまったのでしょうか。

私は、考える仕事などという特別なことがある訳はないのですから、考えることを哲学者などの専売にしてしまうことは止めた方がよいと思います。そして考える人の新しいポーズを創りたいと思います。八の字などは寄せず、にこやかに笑い、じっと腰かけているのではなしに、せっせと自分の仕事にいそしんでいる人、注意深く、慎重に、しかも堂々と迷うことなく自分のなすべきことをして行く人にこそ、その考える人の名を与えたいと思います。なぜならば、ただ考えることを私たちは憧れるべきではなく、よく考えることをこそ憧れ、そのためにはどうしても健康に動ける体を持たなければなりませんから、結局、よく考える人は立派に行動出来る人にちがいないということになります。

柿の枝にやって来る小鳥たちに対して、私は少し甘すぎる、一種の感傷の交りすぎた見方をしていたことを改めて認めなければなりません。恐らく小鳥たちは、人間のようにあまり意味のない空想に耽ったり、昔のことを徒らに後悔したり、また未来への不安を抱いて絶望

7 考えることについて

に陥ることはないでしょう。この頃はまた四十雀が三羽四羽一緒になってよくやって来ます。木の幹に、またその裂けた皮の間に身を隠して冬を越している虫をさがしに来るのです。その確信を持った探し方、機敏な身のこなし、そしてそれらの自分の生命のための働きをしながら、常に四方に細かく気をくぼる姿、私はむしろここに考える姿を見てもよいと思います。きりっと張った灰色の胸に、黒いつややかな筋を一本入れて、四十雀は明日も早春のまだ冷たい天から、落ち込むように私の窓辺へやって来るでしょう。

見ることに ついて

私は野原を歩いたり、山を歩いたりしています時に、名前を知らない植物などによく出会います。名前を知らないものの方が多いのですが、そういう時に、取って来ることが出来る場合には、なるべくその植物の特徴のはっきりしたものを摘むなり、あるいは根から掘って大切に持ちかえりまして、植物図鑑だの、その他の私が持っている書物をたよりにしらべてみます。

ところが持ちかえることの出来ない場合が往々にしてある訳です。例えばそれが大きな木であるとか、掘ることを禁じられている高山植物であるとか、あるいは町を歩いている時に見つけたよその家の庭に生えているものであるとか、むしろそれを持ちかえることの出来ないことの方が多いかも知れません。その時は仕方ありませんから、自分の眼で、それをよ

く見て、覚えて帰るより方法はありません。あまり不思議なものならば、その特徴をノートに書いて来ることがあります。ところがそうして特徴をノートに書いて来ましても、いざ植物図鑑だの他の書物でしらべ出しますと、すぐそれと分ることは実に少ないのでして、大概の時は、何か見落しています。花の花卉だの雌蕊雄蕊の数などは大体覚えていられますけれども、どこか一部分に細かい毛があるかないか、それが今年のびたところか去年のものか、というようなことになりますと、私の観察は実に不完全であって、どっちだったか分らなくなってしまう。しかもそれによって、名前が違ふことが分った時にはほんたうに残念であります。近いところならばもう一度引きかえして、一本の植物のある部分だけを確かめに出かけてもいいという気持ちになります。

このことは、昆虫だの、小鳥だのでもそうで、ずいぶん注意を払って見たつもりでも、細かい記述のある書物と自分の記憶とをつき合せてみますと、必ずといってよいくらい曖昧なところが出て来ます。ところが、普通私たちがものを見るという時には、もっと遥かに曖昧な見方をしています。特に私たちが毎日見ているものを、何か急に想い出そうとすると、それがはっきり想い出せません。自分の家族の顔なり、親しい友人の顔なりを、紙に向って描いてみようと思つたと、絵の上手下手は別にしまして、その顔が頭の中ではちゃんと想い出

せるのに、その記憶は実はあやふやで、顔の幅に対して眼がどのくらいだったか、鼻の位置がどの辺にあったか、それを確信をもって描くことは出来ません。それですから、これは当り前のことではありますけれども、ただ見ることといひましても、その見方は、ほんやりと眺めていることから、注意深く観察することまで、その段階はいろいろあることを改めて考えて頂きたいと思ひます。そして、よく見ることにはむしろ際限がないということを考えて頂きたいのです。

私は暫らく前に、ある地方を旅行しました時に、その地方の小学校の生徒たちが、平素観察をしたものの記録が、展覽されているのを見ました。主として理科の勉強に属するものでしたが、そこにはほんとうに驚くようなものが沢山ありました。その中の一例をお話してみますと、これは確か小学校の二年の女の子の観察記録だと思ひますが、蟻地獄と俗にいわれている、あの軒下や縁の下のような乾いた土のところに見られる漏斗形の小さい穴、ウスバカゲロウの幼虫がその中にいて、蟻などがすべり落ちて来るとそれを食べて育っている、あの蟻地獄を見えます時に、ふと気がつくと、その中のあるものは穴が浅く、またあるものはそれが深いのです。これをその小学生は不思議に思ひまして、一生懸命観察をしました。そしてただ観察するだけではなしに、その土を取って来まして、自分の机の平らな板の上